



Ⅶ. 健康食品管理士になって

一科学者としてのジャーナリズムを一般大衆に還元を

竹村 正男 (中部支部事務局長)

(岐阜大学大学院医学系研究科分子構造学講座・病態情報解析医学)

健康食品と聞くと一般の人々の反応はいかがでしょうか？アンケートを取った訳ではありませんが、多分多くの人達は正しく説明を受け理解できている消費者は少ないのではないかと思います。そこには消費者心理を巧みに計算した広告が存在しており、効果ありきが先行し「個人の感想で効能を示すものではありません」などと片隅に小さい文字で補足説明されている。あるいは深夜や昼間の閑散時間でテレビ放映されている健康食品の商業番組にもテロップで数秒間写し出されている。ほとんどが科学的なエビデンスをもって説明されていない得体のしれないもの、「怪しい」「胡散臭い」「疑わしい」などの思いをするのは私だけでしょうか？効果があればラッキーと思う人、効き目なくても健康食品だからと諦めてしまう人、いろいろな意見があるものと思われまます。今でもインターネット検索すると直接病名を示唆し「〇〇がん」に効きました、糖尿病が治った、リウマチが治って階段の上り下がりできるようになった、など例に出したら切りがないほどの効能があるかのように錯角させ、詐欺的な商品を売り付ける広告が目につきます。そして万能薬のようなうたい文句で一般大衆を誘導し、現在の医療を否定するものまで現れてきています。本来ならば負の影響も掲載してこそ科学的根拠が証明され、一般消費者も納得して購入するのではないのでしょうか。我々の研究室でも肝炎発症マウスにウコンの有効成分とされているクルクミンを投与すると肝炎が増悪しているマウスが観察されており、このような負の注意も消費者に知らせる必要があると思う。またネットの中には著明な方の論評やコメントが掲載されていますが、多くの論文は掲載されている何倍もの反論を紹介し結果を導き妥当性について述べているのが一般的であるにも拘わらず、都合の良い部分だけを抽出し反論部分は削除され大衆受けするページを作成している。その結果、商品のグレードが保たれ、ページ作成者には責任の及ばないように巧妙に導いて、病的弱者を詐欺がいな商法で「精神的恐喝」を与え利益を得ている様な印象をもっています。たしかに中には改善、効能を示す実験結果を提示している商品もあり、すべてが怪しいと考えるのも危険とは思いますが、ほとんどのデータは実験方法が未熟であったり、対象者のバックグラウンドが提示されていないことが多く科学的なエビデンスとは言い難いのが現状と考えられる。また、これらを助長しているのがマスメディアであり、責任の所在を明らかにしておく必要がある。すなわち研究者が研究結果を発表する場合には論文投稿者はその研究に対して責任を持つのは当たり前であり、さらに掲載専門誌側（メディア）も査読委員を設け論文に書かれている事実を精査しており同等に責任を負うことになる。学術メディアと娯楽メディアの差であると言えれば話しは簡単に済むが、一般視聴者の方々には大差なく感じるのではないかと思います。特に民放メディアは高視聴率がスポンサー獲得のポイントとなり、より過激なねつ造事件を産む土壌が常に潜んでおり、製作関係者は一層の努力をしなければ今後も変わらないと思います。

「健康食品管理士になって何か変わりましたか？」と聞かれたら答えは、忙しくなっていましたと答えるしかないです。事務局を担当することになり、同時に管理士会中部支部の立ち上げの「おみやげ？」まで付けて頂くことになりました。

今回の報告は中部支部立ち上げの奮戦記なるものを反省の面も含め報告したいと思います。支部立ち上げに関して平成19年5月から準備会を発足させ、長村理事長にも出席していただき設立の主旨説明から今後の方向性などについて意見の調整がされてきました。さらに議論をすすめる幹事会の設定を行ない、中部支部の設立のための税務署への相談、設立総会での講演依頼の交渉など不馴れな事務処理など網渡りのクリアーしながら、なんとか特別総会開催まで持ってきました。

中部支部は平成19年10月8日に永田 稔 支部長（元病院薬剤師会副会長）はじめ約20名の幹事役員（会報vol.2（4））と570余名の会員で構成され、岐阜国際会議場で立ち上げました。

その日はあいにく台風の影響がおおきく大雨、2ヶ月前から病院、薬局、大学（栄養科）、学会などでポスターの配付や説明会で出席依頼を行ってきたことが無駄になるのではと不安でした。しかし一般公開講座聴講者と会員を含め220名の出席者で、用意していた300部の講演抄録集（会報vol.2（4））を見ながら晴れていたならもう少し入場者が増えたのではないかと雨空を見上げておりました。

今回の特色は全国で初めて講演抄録集を作成し、入場者に配付したことや地元新聞社の後援を頂いたり、地元放送局での長村理事長の放送が行なわれていたなど精力的にアピールされていたと思います。総会準備が整って行く過程で感じたことは、分野の異なる先生方との会合を重ねる度に、この組織はなんと潜在能力を秘めている集団へと成長して行く可能性があると感じました。なぜなら現在、会員数は少ないが各分野の専門知識を持った人材が「食」

をテーマに同じテーブルについている事実が目の前にして、事務局としての役割の重大さを感じております。それぞれの立場を越えて気兼ねなく意見を論じる合える雰囲気を作ることが必要で、



